もう いっこ

村石理恵子

子どもがひたすら同じことを繰り返すことがある。それは、予想通りであったり、予想を超えて感じた楽しさを、もう一回楽しみたい、もう一回味わいたいと望み、自らのからだを動かしていく姿である。

砂場で

三歳児のA子は、日頃から砂を使ったごちそう作りが好きである。今日はかごの中からプリンの空きカップを砂場に持ってきた。カップに砂を入れ、それを砂場の縁にひっくり返してみると、プリンの形ができた。二つできたところで私が「おいしそうね」と声をかけると、「うん！」と言いながら更に作り続け、縁に並べていく。砂の状態が丁

度良かったか、形ができやすく、プリンはそのままの状態で残っていく。A子は、今日は自分で食べたり、人に食べてもらうごっこ遊びにするのでなく、作ること自体に熱中している。

少しして、砂場道具の近くにいたB美が、砂場の中に入ってくる。B美は、A子のやっていることに興味をもち、A子に「(カップを)貸して」と手を出す。A子はB美にカップを渡した。同様に、C夫も関心をもっている様子であり、そばで見ている。A子は、B美が作るのを見ていた。B美も同じように縁にカップを伏せた。そしてカップを上に持ち上げてみると、きれいな形ではなく、上部が少し崩れていた。ちょっとした間があったあと続いてもう一回B美が作る。今度のはプリンカップの形通りになっていた。B美は、ふっと安心したような表情になった。その様子を見たA子が「はい、いいでしょ」とB美に声をかけた。するとB美はすっとカップを渡す。

再びA子がプリンを作り、縁に置いていく。砂場の縁にずらりと十個以上並んでいる。それを見て、私は「たくさんあって、どれもおいしそう。もっと作るの?」と声をかけた。すると、「そう、いっぱい作る」とA子は意気揚々とした様子である。

しばらくすると降園時間が迫り、周囲は片づけているが、A子はやめようとしない。そこで「おしまいはいつ?」と聞くと、「まだまだずっと。みんなのぶん作る」とやめるつもりがない。その様子を見聞きしたB美や他の友だちは、片づけを強く主張しなかった。今まではA子がごちそうとして作ったものを食べる仕草をして「ごちそうさ

ま」。そうすれば、次は崩して片づける、というような遊びの区切りがついていた。しかし、今日の様子から、A子が納得がいくまでやった方がいいと思い、私も「ごちそうさま」と崩すことを促さなかった。そしてA子が「みんなの分」といったのが、既に「A子の家族の分」より多く、二十個近くあったので、「(プリンの)数をかぞえてみようか。一、二、三……」と私は声に出してかぞえてみた。すると十八個あった。近い数として、学級の人数が二十名である。そこで、「○○組のみんなの分なら、あと二個だね」と声をかけると、A子は「うん」と返事をしながら作る。では学級のみんなの分かな……と思いながら待ち、二十個になったところで、「これでおしまい?」と私が尋ねると、「ううん、まだ。」と言う。「みんなの分」は二十個ではなかったのだ。予想は外れ、更に延長戦に入るらしいA子の姿に感心しながらA子の納得のいくまでそばにいたいと思った。が、同時に担任として降園準備を進める必要もあり、私は一旦保育室に戻ることにした。A子自身の納得する時がくることを信じて「自分でおしまいにしてきてね」と話しかけると、「うん」とうなずく。

少し経って、保育室にA子が戻ってくる。ああ、やっぱり自分で納得したんだ、と思った時、A子が「おしっこ……」と言いながら、保育室を通り抜けてトイレに向かおうとした。やめたのは用便のためであった。私はちょっと気が抜けたのだが、A子のその表情は満足感に満ちていた。自分なりに精一杯繰り返して作ったのだ、という笑顔であった。最後は生理的な理由ではあるが、本人としては「おしまい」の区切りがついた

ようである。トイレから戻ったA子に「いっぱいできたんだね」と声を掛けると「うん！」とうなずく。そして、実は日によっては、片づけて降園の身支度をする、という流れの中で、片づけない、自分でカバンを持ってこようとしない、といったこともあるA子が、笑顔のまま身支度に取りかかったのである。砂場を見ると、あとには、プリン型になった砂が列になって残っていた。

降園後、掃除を始めた私は、砂場の縁に並んだプリンが愛おしくみえた。A子が繰り返している姿を思い出して、同僚と一緒に「よく作ったね」と感心しあった。同じことを繰り返してA子は楽しかったことが伺える。それがあとに残っている時には、その「残されたもの」にちょっと見惚れてしまう感じである。この日は周囲にいた友だちは少なかった。また途中で少しだけ加わった友だちもいたが、とにかくできあがったものを壊すような雰囲気はなかった。砂場という繰り返し壊し創造する場所であったが、このような同じものの繰り返しを楽しんでいる場合、完成した状態であっても途中であっても、もういっこ、もういっこという意気込みの過程やその結果を見た友だちは壊す気にはなれないでしょう、と私たちは話しあったのである。

枇杷の実

同じ頃、園庭の枇杷の木に実った実を、とっては食べ、とっては食べ……、という姿が見られ

た。めざとく見つけた年長の子どもが食べ、そのおいしさは「実がなっている」「とって食べていい」と三歳児にも伝わってきたのである。枇杷の木には、たわわに実った実がいくつもいくつもついている。まだ堅い実は枝からとるのに苦労するが、柔らかい実ならば、枝から自分の手でとるのは、三歳児にとっても割合と簡単であった。そして甘く、やわらかなその味は、次々にリピーターを呼んでいた。中にはお母さんにも食べさせたくて、こっそりポケットに入れていた子どもも何人かいた。何日かすると、枇杷仲間のようになり、年長の子どもが枝に登ってとってくれたり、枝をひっぱってとりやすい位置に下げてくれたりした。皮のむき始めを手伝えば、あとは「自分でできるから」と、私たちの手伝いをことわった食いしん坊たちが「もういっこ食べたい」「もういっことる」「もういっこ！」と次々に枇杷を味わっていた。豊作だったのである。

果汁を垂らしながら実を食べる子どもの中にD太がいた。日頃やや不安定な姿もあり、遊びの中で自分から「もっと○○したい」という要求を表しにくい、遠慮がちに自分の居場所を探しながら過ごしているともいえるような子どもであった。そのD太が、「もういっこ！」と要求したのである。私は嬉しかった。「そう、おいしい？　もういっこ食べたい？」と声をかけ、次の実を採れるように「どれがいいかな」と、枝をひっぱった。D太が実をとって笑顔になったところで、私の「秘密」をD太に話すことにした。

私は、枇杷を食べると舌がしびれ、喉がいがいがとして閉じていく感覚になる。「枇杷アレルギー」らしいのである。私が「アレルギーで枇杷は食べられないの」と伝える

と、D太はとても驚いていた。そして驚きながらも安心した表情になった。自身の体質から、共感したのだ。秘密を打ち明けて、私もほっとした。D太は自信をもったような笑顔で「ぼくは、食べられるよ」と言った。保育者が同じことをしなくても、別の意味では「できない」からこそ、要求を表したことの意味や意義、私が嬉しいと思っていることがD太に還っていったような気がした。

D太だけでなく、子どもは今どきならではの内的外的な制限で、我慢をしたり、ためらったり、無理をしたりするのかもしれない。そんな中、「もういっこ食べたい」と思い切り気持ちを出せ、それを叶えてくれる枇杷の豊作は、子どもにとっても保育者にとってもありがたいものであった（……食べられないのを知っていて、私の目の前でいたずらっぽく笑いながら枇杷を食べる同僚がいたのも、いい思い出になる）。

砂場のA子も、枇杷のD太も〝もういっこ〟という思いがあった。子どもが同じことを繰り返す行動には、一つのことに楽しさを感じ、同じことを求める素直な心の動きがある。その心の動きは、素材や対象が、その楽しさをもたらす恵みを繰り返し与えてくれることで、しっかりとした安心感や満足感へとつながっていく。その恵みに感謝しつつ、そばにいてそんなふうに心を動かし、からだを動かしていく子どもたちの姿を「もう一回」「もう一人」と思う私である。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）